本棚の一番上、手が届かない本が気になる、と栞（しおり）が伝えると、その司書は軽くジャンプしてふわりと宙に浮いた。床の上から唖然と見上げる栞に、司書は空中で「どの本です？」と、なんでもないかのように話しかける。

「なんで空を飛べるんですか？」

栞が聞くと、司書は腕を組んで困った表情を見せた。

「それが、私にもわからないんですよね。飛べたら便利そうだなー、って思って練習してたら飛べるようになってました。自転車に乗るのと同じ感じじゃないですかね」

絶対違うと思う。栞は心の中でそうツッコんだ。

「えっと、そこの右から三つ目の、赤い背表紙の、そう、それです」

目を凝らして司書の指の動きを見ながら栞が言う。目的の本を本棚から引き出した司書が、ワイン色の絨毯にそっと着地した。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

司書から目的の本を受け取った栞は、本ではなく司書の体をまじまじと見つめた。

「やっぱり変です？」

栞の視線に気づいた司書が聞く。栞は少しの間黙って考えたものの、下手な嘘をつくのはやめることにした。

「変だと思います」

「そっかあ」

司書が肩を落とす。

「外ではあんまり飛ばないようにしてるんです。変な目で見られますし。まあ、図書館でもはしごを使えばいいんですけど、取りに行くのが面倒で」

栞は頭をフル回転させて「そりゃ変な目で見られるでしょうね」以外の言葉を探した。

「でも、そうやって飛べたら、ちょっと楽しそうですね」

ようやく見つけた言葉を栞が言うと、司書は予想に反してつまらなさそうな顔をした。

「そうでもないですよ」

とん、と司書が床を蹴ると、再び身体がふわりと浮かび上がる。本棚の上方、本の上に積もった埃を払い、誤った場所にある本を正しい場所へ移し変えていく。

「一度、外で空高く飛んでみたことがあるんです。何があったと思いますか？」

栞は司書を見上げたまま何も答えず、次の言葉を待った。

「何もありませんでした」

司書が抑揚の無い声でそう言い、そっと床に足を下ろす。

たとえ飛べなくても

2024年12月8日 発行（第12回 そこの路地入ったとこ文庫）
発行元：七雪珈琲
著　者：七雪 凛音 / Rinne Nanayuki

本書の一部、全文、および表紙等の無断転載を禁じます。
感想大歓迎です。
メールや各SNSメッセージなどでお知らせください。

◆ E-mail　7snowrin@gmail.com
◆ Web Page　https://7snowrin.me/
◆ カクヨム　https://kakuyomu.jp/users/7snowrin

◆ X(twitter)　@7snowrin
◆ mastodon　@7snowrin@7snowrin.net
◆ Bluesky　@7snowrin.me

「たくさんの人が行き交う街も、黄金色に輝く水田も、鳥のさえずりと木々の音、木漏れ日が溢れる森も、潮騒と海も、何もない。ただ、無限に広がる雲と、空があるだけ。それは、ほとんど何もないに等しい」

どこか寂し気な表情を見せる司書に、栞はどう反応すればいいかわからず、手にした本を胸にぎゅっと抱いた。

「だから、飛べなくても、この世界は十分に楽しいんです」

司書は心の底からそう思って言っているのだろう。けれども、いまの栞には司書の言葉を素直に受け止めることができない。

「そうかもしれませんね」

「疑ってますね？」

栞の心を見透かしたように司書が言う。

「そうだ、一緒に飛んでみます？」

「えっ」

司書が驚いた栞の両手を取り、ぱっと地面から飛び上がる。

「ほら、ジャンプしてみて、いっせーので、で」

「え、待って、ちょ」

「いっ、せー、のー、でっ」

心の準備をする間もなく、栞は司書に言われるまま、その場で思い切りジャンプした。一瞬だけ司書と同じ高さまで浮いたものの、そのまま重力に従って、地面に着地する。

栞は、空中でにやにやと笑う司書を見上げて、頬を膨らませた。

「からかいましたね？」

司書はにやにやと笑いながら、何事も無かったかのように着地する。

「絶対飛べたほうが楽しいでしょ」

栞がそう言うと、司書は一瞬だけ寂し気な表情を見せた。急に目に飛び込んだその顔は、なぜか栞の心に小さくやわらかなとげを残した。

「いつか飛べるようになったらわかりますよ、きっと」

そう言って司書はお辞儀をして、栞に背を向ける。

飛べるようになる予定はないんだけど、と思いながらも、栞はさっき司書が見せた寂し気な表情が頭から離れずにいた。

一週間後、借りた本を返すために再び図書館を訪れた栞は、あの司書を探した。

どこにも見つからなかった。目的の本を取ってもらった場所はもちろん、一階の一般書コーナー、歴史書、児童文学まで、あらゆる場所を探しても、あの空飛ぶ司書はいなかった。

次の週も、その次の週も、同じ図書館に行ってみても、あの司書は見当たらない。

とはいえ、他の人に聞くにしても名前がわからないし、顔だってあの寂し気な表情しか覚えていない。かといって、いきなり「空を飛ぶ司書さんがいませんでいたか」なんて聞いたら、栞が変な目で見られるに決まっている。

結局、栞はそれ以降、あの空飛ぶ司書と会うことはなかった。

大学を卒業した後、栞も司書になった。

もともとこっそりと憧れていた職業だったのもある。けれどもそれより、あの空飛ぶ司書のことが気になっていた。もう一度会いたい、というわけではなく、ただ、あの人と同じ景色を見れば、あの人の言っていたことがわかるかもしれないと思っていた。

図書館で、ときどき人の目を盗んでは、飛べるかどうか確かめるためにジャンプしてみる。けれども、あの司書のように宙に浮くことはできない。考えてみれば当たり前のこと。結局、栞は空を飛べるようにはならなかった。

それでも、年を重ねるごとに、少しずつ、あの空飛ぶ司書が言っていたことを理解できるようになった。

――飛べなくても、この世界は十分に楽しいんです

それはどうやら本当のことのように思えた。

地面が続く限り、どこへでも行ける。幸い、自分が飛べなくても、空を飛ぶ飛行機もあれば、飛ぶように走る電車も、海を越えられる船だってある。時には自分の足で、山の枯れ枝を踏み、海の砂浜につま先を沈め、硬いアスファルトの上も歩いた。あちこち旅をして、たくさんの景色を見るたびに、栞はあの司書の言葉を思い出していた。

「あの」

声をかけられてはっとした栞が振り返る。

「はいっ、どうされました？」

「上にある本を取ってほしいんですが」

初老の女性はそう言って、本の題名が書かれたメモを栞に手渡した。

栞はもう一度、その場で小さく跳ねてみる。やっぱり、飛ぶことなんてできない。

「はしご、持ってきますね」

栞はそう言ってにこりと笑った。